

大学の未来、教養の行方 ―大学はなぜ必要か？ 何のための教養か？

- ・ジャック・デリダ『条件なき大学』西山雄二訳、月曜社、2008年。
- ・G. C. スピヴァク『ある学問の死 惑星思考の比較文学へ』上村忠男・鈴木聡訳、みすず書房、2004年。
- ・E.W.サイード『人文学と批評の使命 デモクラシーのために』村山敏勝・三宅敦子訳、岩波書店、2006年。
- ・ビル・レディングズ『廃墟のなかの大学』青木健・斎藤信平訳、法政大学出版局、2000年。
- ・ヤーロスラフ・ペリカン『大学とは何か』田口孝夫訳、法政大学出版局、1996年。
- ・ピエール・ブルデュー、ジャン＝クロード・パスロン『遺産相続者たち―学生と文化』戸田清、高塚浩由樹、小澤浩明訳、藤原書店、1997年。
- ・ピエール・ブルデュー『ホモ・アカデミクス』石崎晴己・東松秀雄訳、藤原書店、1997年。
- ・アルヴィン・カーナン編『人文科学に何が起きたか アメリカの経験』木村武史訳、玉川大学出版部、2001年。
- ・ハンス・ヴェルナー・プラール『大学制度の社会史』山本尤訳、法政大学出版局、1988年。
- ・デュリュ＝ベラ『フランスの学歴インフレと格差社会』、明石書店、2007年。
- ・『カント全集 18 諸学部の争い』岩波書店、2002年。
- ・『ヘーゲル教育著作集』上妻精編訳、国文社、1988年。
- ・マックス・ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫、1936年。
- ・シェリング『学問論』勝田守一訳、岩波文庫、1957年。
- ・ジェームズ・ミル『教育論・政府論』、岩波文庫、1983年。
- ・デューイ『民主主義と教育』、岩波文庫、1975年。

- ・学術研究フォーラム編『大学はなぜ必要か』NTT出版、2008年。
- ・苧部直『移りゆく「教養」』NTT出版、2007年。
- ・本田由紀『多元化する〈能力〉と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』、NTT出版、2005年。
- ・竹内洋『大衆モダニズムの夢の跡―彷徨する「教養」と大学』新曜社、2001年。
- ・蓮實重彦『私が大学について知っている二、三の事柄』東京大学出版会、2001年。
- ・『教育ルネサンス 東大解剖』、中央公論社、2008年。
- ・アレゼール日本編『大学界改造要綱』藤原書店、2003年。
- ・小林康夫『大学は緑の眼をもつ』未来社、1997年。

- ・阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書、1997年。
 - ・金子元久『大学の教育力—何を教え、学ぶか』ちくま新書、2007年。
 - ・寺崎昌男『東京大学の歴史 大学制度の先駆け』講談社学術文庫、2007年。
 - ・水月昭道『高学歴ワーキングプア』光文社新書、2007年。
 - ・潮木守一『世界の大学危機—新しい大学像を求めて』中公新書、2004年。
 - ・森博嗣『大学の話をしましょうか—最高学府のデバイスとポテンシャル』中公新書ラクレ、2005年。
 - ・竹内洋『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年。
 - ・中井浩一『大学入試の戦後史—受験地獄から全入時代へ』中公新書ラクレ、2007年。
 - ・喜多村和之『大学は生まれ変わるか—国際化する大学評価のなかで』中公新書、2002年。
 - ・杉山幸丸『崖っぷち弱小大学物語』中公新書ラクレ、2004年。
 - ・古沢由紀子『大学サバイバル—再生への選択』集英社新書、2001年。
 - ・石渡嶺司『最高学府はバカだらけ—全入時代の大学「崖っぷち」事情』光文社新書、2007年。
 - ・小林哲夫『ニッポンの大学』講談社現代新書、2007年。
 - ・廣川洋一『ギリシア人の教育—教養とはなにか』岩波新書、1990年。
-
- ・『季刊 InterCommunication 特集：大学—21世紀の知のシステム』、No. 48、2004 Spring、NTT 出版。
 - ・『科学 特集：大学はどうなるのか?』、Vol. 74、No. 4、岩波書店、2004年4月号。
 - ・『表象 01』表象文化論学会、月曜社、2007年
 - ・『科学 特集：《競争》にさらされる大学—法人化後の評価』、Vol. 77、No. 5、岩波書店、2007年5月号。